

# 私の“ふるさと”

み た む ら つ ね ゆ き  
や め  
八女市長(福岡県) **三田村統之**  
*Tsuneyuki Mitamura*



## わがまち八女自慢

白い紙に、「八」と「女」と書いて、すぐに「やめ」と読める人はどのくらいいるのでしょうか。残念ながら当地にゆかりのある人以外には、全国的には多くないと思います。実際、「これはどう読むんですか?」と尋ねられて寂しい思いをした経験が私にもあります。しかし、この「八女」という字の後に「茶」の字を足せば、とたんに高級茶の全国ブランドとしての存在感が増します。八女茶のなかでも最上位にランクされる「八女伝統本玉露」は、農林水産省から真っ先にGI(地理的表示保護制度)に登録されました。川霧のたちこめる山間の段々畑で



道の駅「たちばな」に並ぶ色鮮やかなフルーツ

丹精込めて育てられた茶葉とその加工技術は、わがまちの大切な宝物です。

八女市は福岡県の南端に位置し、福岡と熊本、そして大分との県境を形づくっています。市東部の美しい森に蓄えられた水は一級河川矢部川として、肥沃な農地を潤しながら西の有明海に向かいます。扇状地に拓かれた園地では茶のほかにもブドウやミカン、キウイフルーツなどの高級フルーツが栽培されています。平野部の優良農地は大規模な穀倉地帯となっていますが、近年は施設園芸も盛んで県内でも指折りの食料供給地となっています。一方、古くから交通の要衝として繁栄した市街地には、「八女福島白壁の町並み」や「黒木の町並み」という二つの重要伝統的建造物群保存地区があり、その面影を残しています。

このような、多彩な魅力に恵まれたまちは、平成の大合併により、総面積482.44km<sup>2</sup>という県内有数の広大な面積となって誕生しました。そこには、地形や気候、産業など暮らしの様子を異にする地域が存在します。各地では周年ほぼ途切れなく、それぞれの地域の特徴を活かした行事が開かれています。私もご案内のあった催しには、日程が重複しない限り参加しています。平日と土日との区別のないスケジューリングを心配してくれる人もいますが、地域の方々との楽しいひと時は、私にはよい息抜きのお机になりました。

## 合併そして豪雨災害

ところが、視点をそれぞれの地域の暮らしに移すと、その多様性は大きな政策課題に変わります。合併後の統一感を育てつつも、それぞれ様子の異なる地域の将来を描きながら施策を考える必要があります。それは、決して潤沢とは言えない財政状況のなかで、「地域格差」として解消を急ぐべきテーマと、逆に「地域の特徴」として守るべきものを見分ける作業です。当時はまだ事例の少なかつた公設民営による全市域への光ファイバー網整備事業や、高齢者などの



平成24年7月九州北部豪雨災害現場に向かう筆者



国指定重要無形民俗文化財「八女福島の燈籠人形」

交通弱者に向けた予約型乗り合いタクシー事業などには現在でも全国から視察が相次いでいます。

合併後のいくつかの大きな事業に目途が立ちかけたところで、本市を豪雨災害が襲います。平成24年7月11日から降り続いた雨量は64.9mmを記録し、死傷者も出る大災害となりました。被災直後に自衛隊ヘリ

コプターの窓から見た市内の惨状はいまでも脳裏に鮮明です。被害の大きかった地域は、いずれも山間の過疎と高齢化の進む地域でした。その時私は、被災地の日常と被災者の心に希望の灯を取り戻すことを市長の使命として胸に刻みました。関係機関並びに全国各地から寄せられた多くの支援、そして被災者自身の努力で、平成30年9月に『平成24年7月九州北部豪雨災害復旧事業竣工式』を迎えることができました。

## 作家五木寛之さんの面会

ところで最近、ふるさと納税のニュースをよく耳にします。返礼品について地方に節度を求める声が高まっているようですが、私は、この制度を市外のいろいろな方々との付き合いが生まれるともありがたいものと考えています。実際に本市の制度にも多くのご利用があり、特産の「博多あまおう」は人気の品です。ただ、今回の騒動を見聞きしていて「ふるさと」という言葉が、その語感としてのふくらみやぬくもりも失くしてしまったようで、少し残念な気持ちでいます。

というのも先日、直木賞作家であり多くのベストセラーを出している五木寛之さんとの面会の機会をいただき、氏の「ふるさと」へのあたたかい想いに触れていたからです。五木さんは本市の出身で、私の大学の先輩でもあります。しかし、これまで私たち地元は、五木さんと上手なお付き合いができずにいて、面会に際して私には少し後ろめたい気持ちもありました。しかし、実際はとても和やかに迎えていただき、会話を弾んで予定の時間を超えるほどでした。五木さんにも喜んでいただけたのか、再び面会のお誘いがあり、私や「ふるさと八女」と五木さんとの距離がぐっと近づいたようで大変嬉しく、安堵しました。

この原稿の依頼を受けて、改めて無趣味



大茶園を背景に八女伝統本玉露をPRする筆者

である自分自身と家族の支えのありがたさを感じています。おかげさまで、これまで市議会議員として8年、県議会議員として20年を務め上げることができ、そして今年、市長として10年目を迎えます。ほとんど仕事ばかりでプライベートにはあまり膨らみのない自分のことより、魅力あふれる本市や市民の様子を伝えたいと筆をとりました。しかし、出来上がりは市長の職責とはおおよそ似合わない感傷的なものになっています。それはもしかすると、最近大きな病気を経験したこと、そして女手ひとつで苦勞して私を育ててくれた母を亡くしたせいかもしれません。どうかこのコーナーの趣旨に免じてお許しください。